

16 未来のほとけ —弥勒信仰とその美術

〈4コマ〉

みやじ あきら
宮治 昭
名古屋大学名誉教授



[日 時] 4月17日(火) 13:30~15:00, 15:20~16:50
4月18日(水) 10:30~12:00, 13:30~15:00

[テキスト] レジュメ配布

[参考書] 宮治昭『仏像を読み解く～シルクロードの仏教美術～』(春秋社) 2016年
宮治昭『仏像学入門～ほとけたちのルーツを探る～』(春秋社) 2013年

[受講料] 5,800円

(早割 4,800円 ※4月10日までに受講料を納入された場合)

弥勒菩薩といえば、京都・太秦の広隆寺や奈良・斑鳩の中宮寺の半跏思惟像を思い浮かべる方も多いと思います。しかし、半跏思惟像がすべて弥勒菩薩というわけではありません。弥勒菩薩は部派(小乗)仏教でも、大乘仏教でもアジアで広く信仰された「ほとけ」です。それだけにその信仰と美術(造形)は多様な展開を見せています。

弥勒菩薩の最も大きな特徴は、釈尊のあとを継いで、将来仏陀となり、釈尊の説法から漏れた多くの人々を悟りに導いてくれる未来仏という性格です。東アジアでは救世主的な性格をもったほとけとして信仰されたことも少なくありません。

今回は弥勒信仰の成立にまで遡って、弥勒信仰とその美術がどのように形成され、展開したかをお話したいと思います。

仏弟子であった弥勒は、釈尊から将来仏陀となる授記(予言)を受け、兜率天に上生して神々に説法し、遠い将来、転輪聖王のもとで平和で豊かな世界となった時、弥勒はこの世に下って龍華樹の下で悟りを開き、3回にわたって説法するとされます。弥勒信仰には、兜率天にいる弥勒菩薩のもとに生まれたいという「上生信仰」と、弥勒がこの世に下った時に弥勒仏に会って救われたいという「下生信仰」との二つの信仰に分かれますが、それらがどのように形成されたか、経典と美術からそのあり様をお話しします。

- (1) 弥勒経典と弥勒信仰
- (2) 半跏思惟菩薩像について
- (3) 弥勒上生信仰とその美術
- (4) 弥勒下生信仰とその美術